

介護老人保健施設しおん

症例概要 利用者:男性 80代 要介護1

利用期間:2020年2月中旬～

経過:2020年1月中旬 当施設入所中に右大腿骨骨折にて入院。退院後、2月中旬に当施設へ再入所となった。

内 容

再入所当初はADLの低下により排泄はオムツを装着しベッドでの生活となっていました。生活全般の動作も介助を要する状態でした。離床しても活気がなく、テーブルに伏せて眠ることが日課となっていました。

再入所前はシルバーカーを使用し、自立で歩行や移動を行っていた為、車椅子での生活は利用者さんにとって初めての経験でもあり、自ら行動に移すこともなく、ただ伏せて眠ることしかできていませんでした。全てにおいて介助が必要になった事に対し利用者さんは「なんでこんな風になってしまったんだろう。申し訳ない、すみません」と何度も職員に対し謝っていました。その都度「少しずつリハビリを行いながら自分で出来る事を増やして行きましょうね」と声掛けを行い利用者さんを励ましなが有意的にリハビリに取り組めるよう常に声掛けを行っていきました。ユニットでは離床後の活動を通して活気を取り戻すよう、まずは車椅子に慣れていただくよう操作の訓練から始めました。ブレーキ操作、自操の訓練を生活リハビリとし実施しました。拒否などの行動はなく積極的に取り組んでいただきました。それに伴い、排泄のADL向上に向け、自操にてトイレへ誘導するアプローチも行っていました。以前の利用者さんのようにトイレでの排泄も目指し、リハビリと連携を取り、トイレ動作の訓練を始め、ユニットでは定時にトイレへ誘導し排泄をすすめていきました。

その成果もあり、尿意、便意も徐々にだが出現し、トイレへ自操し始める行動も見られてきました。車椅子からの移乗も骨折の影響で、立ち上がりの際に介助が必要でしたが、現在では自力で行えるようになり、見守りレベルまで向上しました。それに伴い、トイレでの一連動作が楽に行えるようリハビリパンツへと変更し、見守りと声掛けでズボンの上げ下げも行ってもらっています。夜間もオムツ装着をしていましたが、日中トイレでの排泄が習慣になると尿意が戻り、リハビリパンツへと変更し、夜間もトイレでの排泄が可能になりました。離床時間もテレビを観る時間、新聞を読む時間が確保され、生活のリズムが整ってきました。利用者さんは以前のようにシルバーカーを使用し、自身で歩けるようになりたいとい



う目標も掲げる程に活気も出てきました。この思いを大切に、利用者さんの目標に一日でも早く近づけるよう他職種と連携のもとサポートしていきたいと思えます。